



近代福岡の鋳物師

著者	田鍋 隆男
雑誌名	人間文化研究所年報
号	29
ページ	59-81
発行年	2018-08-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00000973/

近代福岡の鋳物師

田 鍋 隆 男

はつらひ

近世福岡藩の主な鋳物師に、大田（太田）、山鹿、磯野、柴藤そして深見の五家があった。大田家は芦屋釜で有名な遠賀郡芦屋の山鹿出身の鋳物師で、十七世紀に博多あるいは姪浜に移住し（貝原益軒編『筑前国統風土記』一七〇九年（宝永六）、のち博多金屋町で鋳物業を再開するが十八世紀後半頃に改姓して山鹿を名のつた（加藤一純編『治工山鹿氏系譜序』一七八三年（天明三））。磯野家は近江国（滋賀）から怡土郡高祖城に來た磯野弾正兵衛員親の孫が十六世紀後半に博多に移住し、金屋小路のち土居町にて鋳物業を営んだ（江島茂逸編『磯野家系譜』一九〇四年 福岡市指定文化財）。柴藤家の祖先是柴田勝家の同族で、羽柴秀吉との覇権争いに敗れ筑前国姪浜に落ちのびて聞達を恐れて柴藤と改姓したといわれ、十七世紀前半に博多西町下に移って鋳物業を始めている（津田元順・元貫編『石城志』一七六五年（明和二））。深見家もまた戦国期に上野国（群馬）から主君の娘の婚姻に随従して黒田家の家臣となった、深見五郎右衛門重昌（重昌カ）の孫が町中に住んで鋳物業を始めている（『深見興禎墓誌』『福岡県碑誌 筑前之部』大道学館出版部 一九二九

年）。幕末の慶応二年（一八六六）につくられた「博多店連上帳」（備田神社蔵）には、釜屋番に柴藤善左衛門、大乘寺前町に磯野七平、同じく大乘寺前町に深見甚平・平次郎の三家が見えている。なかでも深見家の運上の数字は一四〇〇～一九〇〇匁と、柴藤善左衛門の七〇〇匁や、その他の数匁ないし数一〇匁であるのにくらべてはるかに群を抜いており、深見家の繁盛ぶりがみてとれる（『柴藤家年中行事』秀村選三編『近世福岡博多史料』第一集（財）西日本文化協会 一九八一年）。これら近世福岡藩の鋳物業を担った家のうち、柴藤家はのちに廃業しており、近代以降まで続いたのは山鹿、磯野、深見の三家で、さらに近代福岡の鋳物師の家で目立った活躍をしたのは、福岡市長を輩出した磯野家と農具改良で販路を拡大していった深見家である。

『福岡市史 第一卷明治編』（福岡市役所 一九五九年）の産業編「物名 鍋釜、鋤先」には「鋳物師博多上土居町二戸、釜屋町一戸、厨子町一戸、鋳造五所」と、鋳造業に従事している企業が計九社あると記している。しかし明治三十四年（一九〇一）の「福岡県統計書」（『福岡県史料叢書』第八輯 福岡県庁庶務課別室史料編纂所 一九四九年）の諸工場一覧には「磯野鋳物工場」（上土居町、創業永禄年中、資本金三二、

四八一円」と、「深見鑄物工場」（上土居町、創業寛文三年三月、資本金一八、六一三円）の二社が掲載され、明治三十七年末に調査された工場表には「礪野鑄造場」（上土居町）、「深見本店鑄造場」（上土居町）「礪野鉄工場」（大浜町）など数社が掲載されているのみである。明治四十二年末の調査では「深見鑄造場」（上土居町）と「礪野鑄造場」（上土居町）が書かれている。

明治三十六年の陸軍大演習のときに天皇が福岡市に寄るということで、福岡市の特産品として、博多織、博多人形、文具、そして農具の品々を天覧に供しようとした（『福岡日日新聞』一九〇二年（明治三十五年）十月二十九日二頁）。この農具こそ礪野七平および深見平次郎が経営する工場が生産していた犁先で、天覧に供するほど全国的に知られた特産品であった。明治後半に礪野家と深見家が躍進した一因に犁先農具の生産がある。馬に改良犁をひかせることで深耕が可能となり農業生産高が大きく向上した。そこでその技術を競った競犁会が全国的に実施された。明治四十二年十一月十七日に糸島郡進農会が波多江村で実施した第一回競犁会をみると、県農事試験場技師ら六名の審査員に競技者は一六八名が参加。午前十時に開始し午後五時までおこなわれ、そのあと褒状授与式があり閉会は午後九時頃になりまるまる一日の行事である。礪野商店は犁先など一〇六点、深見商店は優勝旗五流など一〇〇点の賞品を提供している（『福岡日日新聞』一九〇九年（明治四十二年）十二月一日三頁）。

明治四十三年四月に博多商業会議所が発行した「月報附録 福博商工人名録」の金物商の項には、「上土居町一七 兼鑄物業 礪野七平」

と「上土居町九 兼鑄物業 深見平次郎」の二家が記されている。このころの福岡の鑄物業界を代表するのはこの二家になっていた（『福博商工人名録』博多商業会議所 一九一〇年）。

社会貢献の点では、明治三十四年に北清事変（一九〇〇～一九〇一）の戦費や軍艦建造費調達などの時勢を感じて、福博貯蓄奨励会が発足し福博の有力財界人が会員となるが、そのなかに深見平次郎の名がある（『福岡日日新聞』一九〇一年（明治三十四年）十一月七日一頁）。また翌年には中央政府と財界人らの尽力による施薬救療を目的にした財団法人済生会を設立するに当って、その資金を全国の資本家によびかけたが、福岡県が集めた義金総額三七、六五一円の内、礪野七平が一、三七〇円、深見平次郎が一、〇〇〇円と大きな金額を醸出している（『福岡日日新聞』一九一一年（明治四十四年）九月二十八日三頁）。このほかにも二者の社会への貢献度は大きく、多くの褒状牌などが授与されている。

『福岡市案内』（福岡市役所編 一九一六年）によると大正五年頃は鉄工業が長足の進歩をしたとあり、掲載された八社のなかで「礪野鉄工場」（上土居町）と「深見鑄造所」（上土居町）が犁先や鍋釜の生産でダントツの産出額を誇り、あと「礪野鉄工所」（西浜町）や「深見銅器製造所」（下厨子町）などの名が知られている。しかし『福岡市史 第二卷大正編』（六八五頁 福岡市役所 一九六三年）では、大正期福岡市の工産品は明治期の継承にすぎず、依然博多織や鑄物類などの市の特産品がその首部を占めているとある。また『九州日報』の記事として第一次世界大戦の欧州戦はわが国の工業をにわかに発展させたが、福岡市の工業は何等見るべきものはないとして、福岡署所轄管内の各

種工場のなかで常時十五人以上の職工がいる鍋釜や鉄瓶その他製造業の数は五社あり、またその職工数は鍋釜製造で男一四二人、女二人、その内幼年職工は男五人と報告している（『九州日報』一九一七年（大正六）一月二十三日、『福岡市史 第二卷大正編』六九一頁）。大正六年十二月現在の工場には、「磯野鑄造所」（上土居町、工場主磯野七平）や「磯野鉄工所」（西浜町二丁目、工場主磯野孫次郎）、「深見鑄造所」（上土居町、工場主深見平次郎）や「深見工場」（下厨子町、工場主深見浅次郎）など鑄物鉄鋼関係の工場十七社が記載されている（『福岡市史 第二卷大正編』七〇四頁）。

大正十一年三月に発行された『福岡市商工人名録』（博多商業会議所 一九二三年）の「鑄物業」の項をみると、鑄造業で鍋釜や農具、諸金物の製造および卸や小売りで群を抜いた業績（営業税一、六〇二円五錢）をあげているのは「合名会社深見商店」（上土居町九）で、その次は同じく鍋釜や農具の製造卸（営業税八四一円一錢）の「磯野七平」（上土居町四五）である。あいかわらず深見と磯野の勢力は変わらない。これと営業税の桁数がちがう三位以下の企業を列挙すると、鍋釜や農具製造（営業税二四円八九錢）の「今村梅次郎」（下桶屋町四、二、三）、鍋釜や農具、諸金物製造（営業税三五円六六錢）の「鈴木由太郎」（上祇園町六四）、同（営業税二二円六五錢）の「白水庄右衛門」、同（営業税二二円二四錢）の「深見勝次郎」（下厨子町一）、鴨金專業（営業税二〇円五二錢）の「深見喜平」（上厨子町五）、そして陶器唧筒（ポンプ）の金属部分を製造卸をしている「花岡芳松」（下呉服町二二三）などが記されている。

つぎに主な工場および鑄物師（鍛冶師、鑄金家）および主な作例についてみていくことにする。

① 磯野鉄工場（博多上土居町十七、現・福岡市博多区冷泉町）

◎ 磯野七兵衛慶直（九代）

慶直（？）文久二年・一八六二）は幼名七平といい、弘化三年（一八四六）に家名を相続した。先代に次いで福岡藩の石火矢鑄造御用をつとめ年行司次に列し、販路を肥前、肥後、天草、日田方面にまで拡大し、次期の福岡の鑄物業界の第一位を占める基礎を築いた。文久二年九月に五十五歳で没しているが、熱心な真宗大谷派信徒で明治十四年（一八八一）には本山の龍温教師が来博して慶直の肖像画に賛文を題したという。妻ウタは博多石堂町奥村次右衛門の娘にして奥村次吉の妹。七代七左衛門昭も後妻に博多綱場町奥村家から迎え、次代の妻も奥村家からということもあり豪商奥村家との強い結びつきを感じさせる。なお慶直の後妻は博多釜屋小路の山鹿平十郎の二女でこちらは鑄物師どうしの結束である（『磯野家系譜』）。

◎ 磯野七十郎親久（十代）

親久（？）明治二十二年・一八八九）は慶直の嫡男。妻イト（？）大正十年・一九二一）は奥村源兵衛の五女（『磯野家系譜』）。

明治二年（一八六九）四月、博多御供所町（現・福岡市博多区御供所町）の幻住庵（臨濟宗妙心寺派）にある梵鐘に追銘「明治二年己巳夏四月仏生日／天目山幻住庵主猷谷謹誌／八代孫磯野七平彫之」とあり、この「八代孫磯野七平」は親久のことと思われる。なおこの梵鐘

は朝鮮鐘を直模したもので、鐘身に彫られた印刻銘から元禄二年（一六八九）に「治工藤原姓礪野氏孫右衛門尉慶貞／同七兵衛慶永／同吉右衛門正慶」によって制作され、もともと香椎宮にあったことがわかる。しかし明治初期の神仏分離の際に香椎宮の座主香座氏かざらより二〇両にて幻住庵に売却されている（筑紫頼定「香椎宮の神仏分離」『明治維新神仏分離史料』福岡県歴史資料調査報告書第三集「天目山幻住庵所蔵品目録」福岡県文化会館 一九七九年）。

◎礪野七平親保（十一代）

親保は嘉永六年（一八五三）に慶直の次男として上土居町に生れる。幼名は順次郎、実名が親保、松泉は雅号である。父慶直の遺言により十五歳のときに元服して通称七平を名乗る。家業を兄七十郎より受け継いで、扶持方および格年行司次に列し、藩の鑄砲御用も勤めている。さらに生活用具の鍋釜は昭和十年代から朝鮮に輸出するなど評判を得、壱も全国に販路を広げ、博多筑紫銀行頭取や筑豊興業鉄道会社取締役、博多商業会議所副会頭、博多財産区会議長などの公務を歴任し屈指の紳商といわれた。さらに四十歳のとき、明治二十六年一月十一日付けにて福岡市長就任の裁可が内務大臣からおりるが（福岡日日新聞「一八九三年（明治二十六）一月十七日二頁」、病気のために在任わずか一年たらずで辞任せざるをえず、明治二十七年十二月七日に福岡市会に於いて市長辞任が承認された（福岡日日新聞「一八九四年（明治二十七年）十二月八日二頁」）。父同様に浄土真宗の教旨に深く帰依している（江島茂逸編「礪野松泉君小傳」『礪野家系譜』一九〇四年）。明治三十年（一八九七）十月二十四日に四十四歳の若さで心臓疾患のため逝去。葬儀は

博多川口町（現・福岡市博多区上川端町）にあった妙行寺（浄土真宗大谷派、戦災により福岡市南区野間に移転）でおこなわれた（福岡日日新聞「一八九七年（明治三十）十月二十六日五頁」）。

作例としては明治三十年三月に博多御供所町（現・福岡市博多区御供所町）東長寺（真言宗）にある半鐘を、以前の鐘が毀損したので旧藩主黒田長成侯や有志者の寄付により鑄造している。胴部にある陽鑄銘に「博多治工礪野七平親保」とある（福岡市文化財調査目録5「東長寺収蔵品目録」六六頁 福岡市教育委員会 一九九三年）。

◎礪野七平保慶（十二代）

保慶は明治十五年（一八八二）に親久の三男として生まれた。初名を恭三郎といい、親保の長男が別家にて営業を始め、さらに次男敬次郎が十六歳にて早世したために、十代にして親保の養子となって名跡を嗣ぐことになった。妻ツネは野村久左衛門の二女である（『礪野家系譜』）。

明治三十一年（一八九八）、博多片土居称名寺（時宗）の征清紀念大仏の双手が鑄上ったので、十一月十三日に博多高砂連の世話人有志がこれを曳いて賑々しく礪野鉄工所から称名寺境内に引き入れている。遷座式には礪野七平の代理で礪野孫兵衛が出席している（福岡日日新聞「一八九八年（明治三十一年）十一月十三日二頁」）。

明治三十三年にツルベやバケツを主な製品とした瀬戸バケツ工場を大乗寺前町に創業している（福岡市史 第二巻大正篇 七〇五頁）。

明治三十五年一月に糟屋郡久山町山田字小路（現・大字山田）清谷寺（臨済宗沙心寺派）の半鐘を鑄造。鐘身の銘文に「筑前博多／治工

磯野七平保慶」「寄付者／博多上土居町／磯野貞／世話人／博多古小路町／大山卯三郎／明治三十五年／一月吉日」とある（『久山町誌』下巻 久山町 一九九六年）。

明治三十六年六月十一日に建塔式をおこなった、博多御供所町の聖福寺（臨濟宗妙心寺派）瑞応庵の釈迦像付永代供養塔を鑄造。納骨塔の中に出山釈迦像が安置された（『福岡日日新聞』一九〇三年（明治三十六）六月十日四頁）。

明治三十八年四月十九日の暁に工場が火災にあうが、幸い工場の一部を焼いただけで操業には少しの影響もなかったとのことである。なお『福岡日日新聞』の「出火御見舞御礼」の記事にかかれた工場名は「磯野七平鑄造所」となっている（『福岡日日新聞』一九〇五年（明治三十八）四月二十日三頁）。

明治三十九年三月三日に浄土真宗大谷派新法主大谷光演（彰如）師が豊前地方巡遊の前に来福。妙行寺にて説教および帰敬式ののち、この日は磯野七平邸に止宿した。（『福岡日日新聞』一九〇六年（明治三十九）三月一日五頁）

明治四十年の旧九月一日の例祭当日に除幕式がおこなわれた福岡県宗像郡（現・宗像市田島）宗像大社の青銅製大華表とらひを鑄造。この華表は宗像郡出身の凱旋軍人一同が三、〇〇〇余円を拠出して、記念として官幣大社宗像神社に奉納したものである（『福岡日日新聞』一九〇七年（明治四十）八月一日五頁）。

明治四十三年五月二十九日に堅粕（現・福岡市東区馬出）の九州帝國大学医学部構内にて除幕式がおこなわれた大森治豊博士銅像を鑄

造。大森治豊は東京帝國大学卒業と同時に福岡医学学校教師として来福。同校が京都帝國大学福岡医科大学となるや大学長兼医院長となり、退官するまで実に三〇年間斯界を牽引し、福岡の近代医学界草創期に大きな功績を残した。後進子弟の間で銅像建設が發起され、経費約一〇、〇〇〇円が集められた。木造原型は郷土出身の彫刻家山崎朝雲が担当し、像高一丈のフロックコート姿である（『福岡日日新聞』一九二二年（大正十）九月十六日二頁）。なお、この像は戦時金属供出により失われ、今ある像は昭和四十八年に地元の彫刻家小田部泰久によって再制作されたものである（実見）。

明治四十五年六月二十一日に竣工した片土居町称名寺の征清記念博多大仏釈迦如来坐像を鑄造。原型は博多呉服町の仏師高田又四郎の精案をとりいれ、明治四十三年の九州沖繩八県共進会開会直前に竣工し同会場に坐像のみが出陳された。明治四十五年六月二十一日に坐像の組立据え付けが完了するが、全国の大仏と比較すると蓮台まで完備したものは奈良と博多のほかになく、高さは大仏中の第三位であることから、博多大仏の名で全国に知られるようになった（『福岡日日新聞』一九二二年（明治四十五）六月二十三日七頁）。このうち称名寺は福岡市外馬出町へ移転した（『福岡日日新聞』一九二三年（大正九）十一月十二日七頁）。

大正四年（一九一五）六月十一日に三潯郡大川町酒見（現・大川市）の風浪神社境内にて除幕式がおこなわれた鐘崎三郎銅像（胸像）を鑄造。鐘崎三郎は三潯郡青木村出身で、日清貿易研究所を経て日本陸軍通訳官となり、日清戦争のとき特別任務を帯びて単身敵地深く入りこみ捕えられて処刑された。享年二十六歳。この忠勇の死に対し陸軍省

などから莫大の弔慰金等が下賜されたこともあり、三潞郡教育会は銅像建設を議決し博多の磯野鉄工場に依頼した。なお除幕式は大正四年五月三十日ともある（『福岡県三潞郡誌』八〇四頁 一九二七年、『福岡日日新聞』一九二三年（大正十）九月十七日二頁）。像は金属供出され、今ある像は昭和四十五年に福岡市の折橋銅器店が復元したもの（実見）。

大正五年十月五日に福岡市西町（現・福岡市中央区今川）の金龍寺（曹洞宗）で除幕式がおこなわれた貝原益軒銅像（坐像）を铸造。貝原益軒（一六三〇～一七一四）は『黒田家譜』や『筑前国続風土記』などを著した筑前の儒学者。住職と檀徒の医師そして磯野七平の三人が発起して益軒会を組織し、明治四十六年の貝原益軒先生没後二百年祭記念事業として企画された（『福岡日日新聞』一九二〇年（明治四十三）八月十日三頁）。銅像建設の発起は明治四十年におこり四十四年に着手、九州帝大解剖学主任教授で美術に造詣が深い櫻井恒次郎博士が骨相学的に端坐して机に向かう姿の益軒像の模型を作製した（『福岡日日新聞』一九一九年（大正八）十月四日七頁）。総高一丈六尺九寸、工費は六、八〇〇円。（北澤憲昭総監修 田中修二監修 シリーズ・近代日本のモニュメント1 『銅像写真集 偉人の像（図版篇）』六二頁 ゆまに書房 二〇〇九年）

大正七年十一月十四日に長崎市寺町にある興福寺（黄檗宗）境内にて除幕式をおこなった蘇道生銅像を铸造。末裔の蘇道之によって建設されたもので、原型も磯野七平铸造所にて製作された。（『銅像写真集 偉人の像（図版篇）』一九二頁）

大正十三年四月八日に博多御供所町幻住庵にて、灌仏堂建設報恩会主催の開眼式をおこなった釈迦誕生仏を铸造。幻住庵の韜光和尙が釈

尊報恩会をおこして一〇年目にあたり、信者一同は謝恩のために灌仏堂建設会を発企して、本尊釈迦誕生仏を制作することにした。なお青銅製誕生仏の体内にはインドの釈迦誕生地の土砂が納入されたという（『福岡日日新聞』一九二四年（大正十三）四月八日三頁）。

◎磯野孫兵衛

明治三十一年（一八九八）十一月十三日に片土居町の称名寺でおこなわれた征清記念博多大仏の遷座式にて、磯野七平の代理として出席する（『福岡日日新聞』一八九八年（明治三十二）十一月十三日二頁）。このことから孫兵衛は磯野七平の鉄工場に所属していたとおもわれる。

◎磯野孫次郎

孫次郎（？～大正七年・一九一八）は『磯野家系譜』にその名は見当たらないが、住所は同じ博多上土居町である。明治十七年七月の新聞に新製水汲用ポンプを発売（『福岡日日新聞』一八八四年（明治十七）七月二十九日四頁）とあることから、铸造業でなく販売の方とおもわれる。明治三十年十月に鞍手郡直方町（現・直方市）のお多福亭で開催された福岡県鉄工同業組合定式会で、福島岩次郎組長が病気のため辞任したので、その後任組長として多数の票を得て選出されている。名声があったということであろう。これによって同組合本部が直方町から福岡市に移設されることになった（『福岡日日新聞』一八九七年（明治三十）十月十二日五頁）。

② 磯野鉄工所（築港西浜町二丁目）

創業は明治十九年一月で、主に器械や汽缶を製作している（福岡市

史 第一卷明治編』八二二頁 福岡市役所 一九五九年、『福岡市史 第二卷大正編』七〇四頁では創業は明治四十四年七月となっている。『福岡日日新聞』紙上に移転広告がでており、「移転 博多築港西浜町二丁目 磯野鉄工所 電話(長)三〇九番」とある。大正初期には職工三〇名を擁し、諸器械を生産して産出額は「磯野鑄工場」(上土居町)と「深見鑄造所」(上土居町)に次ぐ鉄鑄物業界第三位である(『福岡市案内』福岡市役所 一九一六年)。大正末期には「株式会社磯野真鍋鉄工所」(西浜町二丁目一九、二〇)となっており、鉦山用諸器械や船舶用汽缶、漁業用発動機、鉄骨、煙突などを製造(営業税一三三円七九銭)している(『福岡市商工人名録』一一頁)。

③ 深見鉄工場 (博多上土居町九、現・福岡市博多区冷泉町)

深見家の始祖は、仕えていた信州の城主の息女が黒田長政に輿入れする際に伴ってきた深谷兵庫(のち深見五郎右衛門重島と改名)で、その三男は上土居町(現・博多区店屋町)に移住して町人となり、その子甚兵衛興良が鍋釜等製造の鑄物業を始めた(『深見興禎墓誌』、『福岡市史 第二卷大正編』七〇五頁では創業を寛文三年としている)。以後代々福岡藩の御用鑄物師となり、特に大砲や軍器製造では中心的存在であった。近代において鍋釜は勿論、馬を使用した深耕に適した犁先を開発し、その深見式深耕犁はわが国ばかりでなく当時の朝鮮や中国・台湾の農業発展に大きく貢献した。農具以外では記念碑や明治三十七年の日蓮上人銅像台座のレリーフなどを鑄造するが、本格的な銅像制作の第一号は明治四十年の宮崎宮司葦津磯夫銅像である。大正八年(一

九一九)三月に事業の拡張にともない営業組織を変更して「合名会社深見商店鑄造所」と称し、さらに大正十二年には動力機械農具部が増設されて、全国の優良動力農機具の九州一手販売権を得て農村機械化の先鞭を努めた(『沿革』深見製鋼所 一九六六年カ)。

◎ 深見甚三郎興禎 (十代)

興禎(天保元年・一八三〇〜明治四十一年・一九〇八)は当初は平次郎のち甚三郎と称した。文久三年(一八六三)十一月には秋月藩に大砲の製造法を伝授し、翌年には唐銅を用いて二〇貫弾の大砲を鑄造する。その規模の大きさが従来のものに比べ数倍もあつたので鑪たたらを二基新設したとのこと。慶応四年(一八六八)十一月に年行司に選出されるが、明治三年には病気のため辞退している。その後はもっぱら農機具の改良に力をそそぎ数年後には各種の改良鋤や犁を製作、販路を拡大し国内に広く普及させた(『深見興禎墓誌』)。

◎ 深見平次郎興盛 (十一代)

興盛は安政六年(一八五九)八月十六日、福岡区上土居町の瀬戸實弥多の三男(『深見家先祖聖衆位』では釜屋惣右衛門(瀬戸寛信)の二男とある)として生まれる。幼名は羊之助、通称は平次郎。四歳のときに興禎(十代)の養子となり(『改製原戸籍』)、その先代の隠居により家督を相続したのは明治十一年(一八七八)十二月三十日のこと(『改製原戸籍』)。大正七年(一九一八)三月、合名会社博多鑄造所を設立。一部の工場を博多駅の南の明治町に新設し機械類を鑄造している(『深見平次郎君』『天福岡今昔人物誌』)。大正八年(一九一九)三月三十一日、事業の拡張に伴い営業の組織を合名会社に変更。社名を「合名会社深見商店鑄

「造所」と改称した（『沿革』）。大正十一年（一九二二）四月六日、福岡県主催全国改良農具展覧会の授賞式が福岡県三農事試験場内で挙行され、第一類の耕種に関する器具機械部門に出品した犁および犁先が金牌を受賞した。同業の磯野七平も犁で金牌を受賞している（『福岡日日新聞』一九二三年（大正十一）四月七日七頁、『耕耨犁具』深見商店鑄造所 一九三四年カ）。同年、時勢に従い益々農機具の改良研究に努めるため社内に「動力機械農具部」を設置し、全国の優良動力農機具の九州一手販売権を得て、深見農具の名声を博した（『沿革』）。

明治二十三年一月、元福岡警察部長湯地丈雄を中心にすすめられていた元寇記念碑建設に賛同し義捐金三〇円を寄付（『福岡日日新聞』一九〇九年（明治二十三）一月二十四日）。さらに三月には元寇記念碑起工式のための特別寄付金として金一円を寄付している（『福岡日日新聞』一九〇九年（明治二十三）三月二十日二頁）。

明治二十九年六月に遠賀郡洞北村（現・北九州市若松区大字小竹）常福寺（浄土宗）の梵鐘を鑄造（『福岡日日新聞』一八九六年（明治二十九）六月六日二頁）。

明治三十二年七月、糟屋郡箱崎町（現・福岡市東区箱崎）に住む青年二〇余名から、一昨年挙行した伊勢参りの記念として八幡宮に奉納する直径二尺五寸の大鈴の注文を受けた（『福岡日日新聞』一八九九年（明治三十二）七月二十一日五頁）。

明治三十四年五月十日に粕屋郡箱崎町の官幣中社宮崎宮にて建碑式がおこなわれた宮崎宮一千七百年奉祝記念碑を鑄造（『福岡日日新聞』一九〇一年（明治三十四）五月八日四頁）。碑は円柱状で中央に陽鑄で「壹

千七百年奉祝記念碑」とあり、そのまわりに十八段にわたって多くの人名が刻されている（『馬耕鋤先 鍋釜銅器』深見平次郎本店 一九一〇年）。

明治三十六年三月二十二日に筑紫郡太宰府村（現・太宰府市宰府）の太宰府天満宮境内東梅園の噴水池のかたわらで建設式がおこなわれた菅公頌徳碑を鑄造。この碑建立の発起人は南画家吉嗣拜山で、上方額面の三字「頌徳碑」は黒田長成侯によって揮毫された。下方には拝山の揮毫「千秋文字祖／万世帝王師」、下段には古木に梅花のレリーフが彫刻されている。精選された材料で鑄造されていてその費用はとても募金分ではまかなえず、深見平次郎に負うところ大であったという（『福岡日日新聞』一九〇三年（明治三十）三月一日四頁、十三日四頁）。

明治三十九年十一月六日に竣工搬入した福岡県田川郡後藤寺（現田川市平松町）定林寺（曹洞宗）の大梵鐘を鑄造。新聞記事では「深見鑄工所」となっている（『福岡日日新聞』一九〇六年（明治三十九）十一月七日五頁）。

明治四十年九月二十九日に宮崎宮神苑内にて竣工式がおこなわれた葦津磯夫銅像を鑄造。葦津磯夫は宮崎宮宮司として神祇の発展、および福岡農学校長として教育に尽力した。その偉大な功績に対し、各地の神職や農学校出身者らが発起して建設された（『福岡日日新聞』一九〇七年（明治四十）五月二十九日五頁）。ちなみに葦津磯夫銅像が深見鑄工場で制作された肖像鑄造の第一号である（『福岡日日新聞』一九〇七年（明治四十）八月三十一日二頁）。正面をみつめて右手に笏を持ち衣冠束帯の神職の正装姿の立像である（『馬耕鋤先 鍋釜銅器』）。像高は七尺、工費二、〇〇〇円（『銅像写真集 偉人の俤（図版篇）』二三二頁）。同年に八女郡福

島町（現・八女市本町）八女公園内に建立された八女郡戦役記念碑を
鑄造。軍旗を右手に持って直立する兵士像である（『福岡日日新聞』一九
〇七年（明治四十）十二月七日二頁）。碑は戦時金属供出で失われ、戦後に
基台の上に巨大な忠魂碑の石碑が建てられた。碑の竣工年かあるいは
基台回廊の竣工年かわからないが、回廊石柱に「明治四十年四月竣工」
とある（実見 二〇一七年）。

明治四十一年ころに献納された西公園（現・福岡市中央区西公園）
光雲神社の青銅製大華表を鑄造。発注したのは遠賀郡水巻村三好炭坑
の坑主三好徳松である（『福岡日日新聞』一九〇七年（明治四十）十一月一日
五頁）。高さ二丈三尺、柱直径二尺二寸で総重量は六、二〇〇斤ある（福
岡日日新聞 一九〇八年（明治四十二）三月二十六日五頁）。このころ菅崎宮
神苑内箱崎文庫に設置された大三輪長兵衛銅像を鑄造。大三輪長兵衛
は葦津磯夫の実兄で、大阪実業界の重鎮。大阪私立女学校を創立し自
ら薫陶の任にあたっていたが、その教えを受けた生徒たちの旧友会
が、大阪女子教育の鼻祖たる名誉を永く記念する銅像を大阪中之島公
園に建設する計画をたてた。しかし建設地は遺産一〇、〇〇〇円で整
備された箱崎文庫内に変更されている（『福岡日日新聞』一九〇八年（明治
四十二）二月十三日二頁）。右手に何かを持って垂下し左手は屈臂して腰
にあて、蝶ネクタイにモーニングの正装姿で正面をみつめる立像であ
る（『馬耕鋤先 鍋釜銅器』）。

明治四十三年以前に建立した、粕屋郡東公園（現・福岡市博多区東
公園）にある戎神社（現・十日恵比須神社）の戎神社記念碑を鑄造。
円柱の表面には十段にわたって多くの人名が刻まれている（『馬耕鋤先

鍋釜銅器』）。

明治四十三年三月に九州沖縄八県聯合共進会会場の農業館の左方に
設置された博多大仏を鑄造。石台の最上に安置された阿弥陀如来坐像
は金色に輝いて衆目を惹いた（『福岡日日新聞』一九一〇年（明治四十三）
三月十日五頁）。同年四月八日に福岡荒戸杉土手（現・福岡市中央区西
公園）に建立され落成式をおこなった、福岡市尚武会による三十七八
年戦役記念桜樹栽培の記念碑を鑄造。碑の高さは八尺余にして、表面
に「記念櫻」の三文字がある。費用はおよそ一、〇〇〇円とのこと（『福
岡日日新聞』一九一〇年（明治四十三）二月十日三頁）。同年五月一日に奉納
された、粕屋郡山田村（現・粕屋郡久山町大字猪野）の伊野大神宮に
設置された青銅製千人館名台を鑄造。雌雄の鶏の飾が付いた高さ五尺
径四尺七寸の名台である（『福岡日日新聞』一九〇八年（明治四十二）四月二
十二日五頁）。同年五月二日に東中洲旧福岡県農事試験場跡（福岡煙草
製造所向側）において除幕式がおこなわれた、横井時敬発明鹽水選種
法記念碑を鑄造。横井時敬（一八六〇～一九二七）は肥後熊本藩出身。
福岡県農学校教諭、のち福岡勸業試験場長となり、塩水による種籾を
選別する鹽水選種法を考案するなど近代農学の祖といわれた。この碑
は東京美術学校で設計され、高さは一丈五尺余で経費は三、五〇〇円
要した（『福岡日日新聞』一九一〇年（明治四十三）四月二十八日三頁）。同年
七月十三日、東公園にある日蓮上人銅像建設に功績があった日蓮宗僧
佐野前助師が宗務総監に昇任したので、その祝賀会が水茶屋常磐館で
開催されたが、石村虎吉、渡邊與八郎、葦津耕次郎、太田清蔵、進藤
喜平太らとともに発起人となる（『福岡日日新聞』一九一〇年（明治四十三）

七月十二日。同年七月十七日に粕屋郡篠栗村字篠栗上町（現・篠栗町篠栗）にある遍照院（高野山真言宗）に安置された、出山釈迦如来像を鑄造。篠栗新四国の札所である遍照院に、博多観大講や同世話人の奔走尽力により、釈迦如来像が寄進安置されることになった。竣工して設置する前日に像を台車に載せて博多各町を曳いて回り信者に礼拝してもらった。この釈迦像は山中での十二年の修行を終え暴風雨のなかを出山する姿である（『福岡日日新聞』一九一〇年（明治四十三）七月二十五日五頁）。同年八月三日に嘉穂郡飯塚町（現・飯塚市大分）の金毘羅山頂にて除幕式が挙行された日露戦役記念碑を鑄造。嘉穂郡尚武会の発起によるもので落成式には磯野七平、深見平次郎両氏が出席している。碑には小倉出身の奥保鞏陸軍大將が揮毫した文字が刻され、このほかに従軍者二〇四七人の姓名が刻された銘石一台も設置された（『福岡日日新聞』一九一〇年（明治四十三）八月六日五頁）。

明治四十三年末ころに竣工した魔尼寶洲師銅像を鑄造。魔尼寶洲師は東長寺の住職だが、大乘寺の住職をしていた明治の初めころに、寺内にて読書手習いの授業をおこなった。これが冷泉小学校の濫觴ということで、門生らの発起により謝恩の寿像を建設することになった。しかし竣工しても、東長寺境内に建立することの許可が得られず、銅像は頬被りし包帯にまかれたまま越年せざるをえなくなったというが、このあと建立されたかは不明である（『福岡日日新聞』一九一二年（明治四十四）三月十二日五頁）。

明治四十五年三月末ころに福岡市御供所町の聖福寺境内にて除幕式が挙行された供養塔及び高砂爺媼銅像を鑄造。博多高砂連がお浄土参

りを済ました連中の供養のために発起した。中央の大円柱の上には高田又四郎が原型制作した釈迦牟尼仏を奉安し、その左右には円柱上に高砂の爺と媼の銅像をのせ、寄付者の氏名が周囲に刻まれたすこし形の円柱である。しかし高砂爺媼像の原型制作の依頼先をめぐって紛糾し、最終的に爺像を博多人形師の白水六三郎と前崎正兵衛が、媼像を中ノ子吉兵衛が担当して蠟型を制作することになった（『福岡日日新聞』一九一一年（明治四十四）十月二十七日七頁）。

大正三年十一月十四日に嘉穂郡鎮西村（現・飯塚市）大日寺の自邸にて除幕式がおこなわれた岸田牛五郎銅像を鑄造。岸田牛五郎は平恒炭鉱等の坑長として斯界の発展に尽力し、さらに郡会議員から県会議員となり将来有力なる代議士候補として大いに期待されたが、折柄流感にて死去した。佐藤鉱業所関係有志らが宅地内に銅像建設を発起した（『福岡日日新聞』一九二二年（大正十）九月二十五日二頁）。

大正四年十月二十日に福岡市荒津公園（現・福岡市中央区西公園）にて盛大な除幕式があった平野國臣銅像を鑄造。浜町の黒田別邸にて有志者による平野國臣顕彰会が発会し銅像建設をめざした（『福岡日日新聞』一九一一年（明治四十四）十二月十一日二頁）。勤王の志士平野國臣の写真や肖像がなく、國臣の甥で東京美術学校出身の田中助太郎（雪窓）が兄弟や知人に聞いて、美術学校教授高村光雲の指導のもとに助太郎が原型を制作した。髪は茶筌髪、羽織は着ないで短袴にて腰には大小をさす、左手には扇を持ち脚絆草鞋の軽装にて諸國遊説の凜々しき雄姿とする（『福岡日日新聞』一九一五年（大正四）九月二十五日五頁）。昭和十八年に金属供出で失われ、現在ある像は昭和三十九年に再建されたも

ので、作者は地元彫刻家安永良徳。

大正六年一月十一日に太宰府町の吉嗣拝山翁墓前にて除幕式がおこなわれた吉嗣拝山翁骨筆碑を鑄造。吉嗣拝山（一八四六〜一九一五）は四条派絵画を父梅僊に、漢籍を日田の廣瀬淡窓に学び、さらに南画を中西耕石に師事した、詩文書画を能くした文人。門下の萱嶋秀山、藤瀬冠村、杉野僊山、大西蓬萊の四氏により、生前秘蔵の骨筆に擬せた銅製骨筆碑建設を發起した（『福岡日日新聞』一九一六年（大正五）六月四日七頁）。長さ七尺八寸。

大正七年秋ころに粕屋郡篠栗新四国霊場の遍照院（高野山真言宗）に建立される弘法大師銅像を鑄造。弘勤勧善友講会の發起にて、大阪の彫刻家田中祥雲が原型を制作。銅像は大師十九歳のいわゆる修行大師の像である（『福岡日日新聞』一九一七年（大正六）二月二十四日七頁）。同年十月三十一日に除幕式がおこなわれた、甘木町金比羅公園に建設された日清日露戦役記念碑を鑄造。像は軍人が左手に高さが身長半分もある大きな礎の上部を持って直立している（『福岡日日新聞』一九一八年（大正七）十月三十一日七頁）。深見平次郎は除幕式にも参列している（『福岡日日新聞』一九一八年（大正七）十一月二日七頁）。

大正八年六月ころに出身地の八女郡で除幕式がおこなわれた西村千之墓碑を鑄造。西村千之は博多土居町深見鉄工場の店員であったが逝去したので、主人深見平次郎はその忠勤ぶりを賞賛して追悼のため、建設費用を引き受けて自家鑄造の青銅製墓碑を建設することにした（『福岡日日新聞』一九一九年（大正八）六月二十一日七頁）。

大正九年十月八日九日の両日に除幕式が挙行された大分県日田郡日

田町（現・日田市隈龜山町）専念寺（真宗大谷派）の五岳上人銅像を鑄造。平野五岳（一八〇九〜一九三）は専念寺に生まれ、幼にして聡明神童といわれ、廣瀬淡窓の恵光園に学び仏画を易行院法海に学び、画は田能村竹田に師事した。夙に勤王の志厚く松方老侯らと親交があったという（『福岡日日新聞』一九二〇年（大正九）十月八日七頁）。

大正十年（一九二一）十二月二十五日に久留米市櫛原町にて除幕式がおこなわれた田中新吾銅像を鑄造。田中新吾（一八四九〜一九二一）は御井郡下鯉坂村生まれで、福岡県会議員を創設以来二〇年以上務め、さらに水稲の品種「三井神力」の創出、そして暴れ川の筑後川改修を陳情して十二年かけて改修工事を竣工させるなど、筑後地方の農業振興に尽瘁した。フロックコートを着て右足を前に出し両手を垂下してまっすぐ正面を向いて、遠く筑後川及び筑後平野を見つめるようなまなざしの立像である（『銅像写真集 偉人の像（図版篇）』三一六頁）。なお銅像は戦時金属供出によって失われたが、昭和三十五年十一月に胸像が再建有志一同によって郷里の小郡市立味坂小学校（小郡市八坂）の校庭に再建されている（実見）。

大正十一年五月三日に佐賀県西松浦郡伊万里町（現・伊万里市）の伊万里町役場内にて除幕式がおこなわれた中村千代松銅像を鑄造。中村千代松は伊万里町長のときに、水道インフラ整備に尽力した。發起人は松尾廣吉である（『銅像写真集 偉人の像（図版篇）』二五四頁）。

大正十二年六月に大分県宇佐郡の宇佐八幡宮境内接続地に建設され除幕式が行われた南尚銅像を鑄造（『銅像写真集 偉人の像（図版篇）』二四四頁）。南尚（一八三六〜一九一九）は慶応元年（一八六五）に父

市郎兵衛の遺志を継いで広瀬水路の難工事に取り組み、八年の歳月をかけて完成させている。のち単身上京し内務省にて全国の水利土木工事を担当した〔大分百科事典〕七五四頁 大分放送 一九八〇年〕。

大正十四年十月に建設された佐世保市鶴渡越の親鸞聖人銅像を鑄造。大日本仏教救世軍熊本支部長の發起にて地元の賛同を得て建立された。原型作者は田中雪窓。像高一丈五尺、重量約一、〇〇〇貫、工費二〇、四六〇円〔銅像写真集 偉人の佛〔図版篇〕五四頁。なお戦時金属供出のときには頭部のみが門信徒により難を逃れ現存している〔本願寺新報〕二〇一〇年十二月一日二頁〕。

大正十五年一月、福岡市の発展に大いに貢献した渡邊與八郎の銅像を建設しようと、頭山満や団琢磨らとともに發起人になり、さらに石橋愛太郎を銅像建設委員長にして、遠藤甚蔵や大熊浅次郎らとともに相談役になる。銅像の原型製作は郷土出身の彫刻家山崎朝雲に依頼するが、結局建立されず〔渡邊與八郎氏銅像建設趣意書 一九二六年〕。

昭和四年十二月二十六日に隠居して家督を平次郎(十二代)に譲る。
〔改製原戸籍〕 昭和十年に逝去。

◎深見甚平

慶応二年(一八六六)、釜屋番に鑄物師柴藤善左衛門、大乘寺前町に鑄物師磯野七平、同じく大乘寺前町に深見甚平・平次郎の三家が見える〔博多店運上帳〕。

◎深見久七

明治四十一年(一九〇八)八月十二日、博多大浜三丁目の直方屋に於いて開催された福岡地方車輪鍛冶組合の臨時総会で組長に選出され

る〔福岡日日新聞〕一九〇八年(明治四十二)八月十二日〕。

④ 深見鑄物工場(博多下逗子町一番地)

『福岡市史』第一卷明治編の、明治三十四年末と同三十七年十二月末として同四十二年末に調査した福岡区の工場表には、「上土居町」の「深見鑄造場」が掲載されているだけで「下厨子町」の深見工場はない〔福岡市史 第一卷明治編〕八〇九頁、八二一頁、八三三頁。しかし次の『福岡市史 第二卷大正編』の「大正中期中における市内主要工場名」には、「上土居町」の「深見鑄造所」とともに「下厨子町」の「深見工場」が掲載されている〔福岡市史 第二卷大正編〕七〇四頁。ところで、明治二十九年十二月末取調べの各工場の状況に、「深見鑄物工場」(福岡市下厨子町)は、持主は深見孫平、明治三年一月創業、職工男性二七名、製造品数量二六、〇〇〇、同上価額一、八〇〇円とある〔福岡日日新聞〕一八九七年(明治三十)十月三十一日二頁〕。

◎深見孫三郎直次

明治十八年(一八八五)十月、佐賀県西松浦郡有田町(現・有田町大樽)の陶山神社にある青銅製狛犬(有田町指定文化財)を鑄造。背面にある陰刻銘文に「福岡県筑前国博多厨子町住/鑄造人深見孫三郎直次/同 深見孫平直満/次工 大野正助直久」、石製台座に「明治十八年/酉十月吉日」とある。像高一八〇cm(実見)。

◎深見孫平直満

安政五年(一八五八)、宗像郡福岡町(現・福津市)の某神社にある銅製鈴を鑄造。陽鑄銘「安政五年/午年中」と陰刻銘「鑄工厨子町

／「深見孫平」がある。総高三三・〇cm、胴径三一・八cm（『福岡町史』資料編二 美術・建築・民俗 七一頁 福岡町 一九九八年）。

明治十八年（一八八五）十月、佐賀県西松浦郡有田町の陶山神社にある青銅製狛犬（有田町指定文化財）を深見孫三郎直次と大野正助直久とともに鑄造（実見）。

明治三十五年（一九〇二）三月の製作銘がある、筑紫郡千代村（現・福岡市博多区千代）の崇福寺（臨濟宗大徳寺派）の青銅製角香炉を鑄造。底に陰刻銘「明治三十五年三月／博多厨子町鑄冶／深見孫平造之」とある（福岡市文化財調査目録4 『崇福寺収蔵品目録』福岡市教育委員会 一九九〇年）。

◎深見孫助

明治三十二年十月二十九日に、嘉穂郡内野村にある大根神社（大根地神社）に奉納された青銅製馬を鑄造。博多金屋小路の上田勘三郎と西門町の白木一平両氏の発起によるもので、国家安穩の祈禱を行うため奉納した（『福岡日日新聞』一八九九年（明治三十二）十月二十七、二十九日五頁）。

◎大野正助直久

明治十八年（一八八五）十月、佐賀県西松浦郡有田町の陶山神社にある青銅製狛犬（有田町指定文化財）を深見孫三郎直次と深見孫平直満とともに鑄造。狛犬背面の銘に「次工 大野正助直久」とあり、深見家の者ではないが名前に「直」の字をつけていることから、深見鑄物工場では中心的鑄物師と思われる（実見）。

◎深見浅次郎

大正中期の「深見工場」の工場主。鉄および銅器具を生産した（『福岡市史 第二卷大正編』七〇四頁）。

◎深見勝次郎

明治十七年四月二十三日生、鑄物業（小島康雄『第四七二二三号 鑄物同業組合規約公正證書謄本』一九三二年）。

◎深見與四郎

明治二十八年九月十六日生、鑄物業（『第四七二二三号 鑄物同業組合規約公正證書謄本』）。

◎深見朝太郎

明治四十三年四月三十日の第十三回九州沖繩八県聯合共進会の褒章授与式で、金属品部門で四等を受賞（『福岡日日新聞』一九一〇年（明治四十三年）五月二十二日三頁）。

⑤ 深見喜七（上厨子町五番地）

明治二十九年六月十四日生、鑄物業（『第四七二二三号 鑄物同業組合規約公正證書謄本』）。

⑥ 深見機械鑄物工場（大浜町一丁目一〇七番地）

大正元年（一九一二）十二月に創立し、深見清太郎の個人経営である。主に鋳山用機械や鑄鉄管を生産し、市内および若松や長崎に供給していた（『福岡市史 第二卷大正編』七〇八頁）。

◎深見清太郎

明治十七年二月十六日生、鑄物業。（『第四七二二三号 鑄物同業組合規約』）

⑦ 中川市平（大浜町二丁目一〇番地）

明治二十八年六月一日生、鋳物業大崎要吉ほか四名の代理人を兼ねる（『第四七二二三号 鋳物同業組合規約公正證書謄本』）。

⑧ 博多鋳造所（明治町）

大正七年（一九一八）三月に深見平次郎は合名会社博多鋳造所を設立。一部の工場を博多駅の南の明治町に新設し機械類を鋳造した（深見平次郎君）。

⑨ 山鹿銅器鋳造所（上名島町）

幕末期には山鹿平十郎包秋や山鹿喜兵衛包矩、山鹿儀平包信、山鹿儀信包春、山鹿喜兵衛兼広といった鋳物師が活躍するが、明治期の山鹿鋳物師の作例は少ない。

◎山鹿平十郎包永

文政五年（一八二二）十二月に千代町崇福寺にある和鐘と朝鮮半島鐘との混交型殿鐘（福岡市指定文化財）や、天保四年（一八三三）春には多々良妙正寺（浄土真宗本願寺派）にある同じく和鐘と朝鮮半島鐘との混交型の喚鐘（福岡市指定文化財）を鋳造。

明治十七年（一八八四）六月に宗像郡（現・宗像市田島）の宗像大社本殿入口の門前にある青銅製狛犬（阿形）の尻尾を、先年盗難にあつたというので再鋳して修理している。右尻に陰刻銘「鋳工廿一世／山

鹿平十郎包永／同再建世廿三孫／山鹿平十郎包輝／同 佐藤卯介」と修理した鋳物師の名があり、石台には「文政七（一八二四）年甲申」「鋳物師／山鹿平十郎」とある（実見）。石台の「山鹿平十郎」が「包永」のことであれば六十年前の自作狛犬を修理したことになる。

◎山鹿平十郎包輝

明治十七年六月に宗像大社本殿入口の門前にある青銅製狛犬（阿形）の尻尾を再鋳し修理した（実見）。

明治三十九年（一九〇六）三月十日に開催された招魂祭のあと、福岡市出身軍人の日露戦役戦病死者遺族へ贈られた青銅製香炉を鋳造。

これは福岡市尚武会が日露戦役戦病死者の各霊前へ供えるために発起したもので、新聞記事には上名島の鋳物師に依頼したとある（『福岡日日新聞』一九〇六年（明治三十九）三月一、三日五頁）。

明治四十五年五月頃に太宰府神社に奉納された青銅製神みこぼこ鬮箱を鋳造。これは博多の児島善次郎ほか同族十一名により寄進されたもので、制作者は齋藤一と下村鹿太郎とある（『福岡日日新聞』一九二二年（明治四十五）五月二十日五頁）。

大正二年十一月四日に鋳造が竣工し二十八日に開眼供養がおこなわれた、粕屋郡篠栗新四国荒田の新四国二十五番奥ノ院に奉納された弘法大師像を鋳造。発起者は福岡真言講信者十五名で、大正二年の夏頃に博多呉服町の仏師高田又四郎に原型制作を依頼している（『福岡日日新聞』一九一三年（大正二）十一月二十六日七頁）。

大正十一年四月三日から西公園にある光雲神社で挙行された黒田長政公三百年祭において、同神社へ祭りの記念として奉納された青銅製

水槽を鑄造。この水槽は福博の宮世話人一同より奉納されたもの（『福岡日日新聞』一九二二年（大正十一年）四月四日七頁）。大正期には山鹿銅器鑄造所という会社組織になっていたと思われる。

大正十五年七月十八日に練供養をおこなって鳥飼村（現・福岡市中央区鳥飼）の傳正院（天台宗）へ運び込まれた双輪塔を鑄造。この塔は同院内にある毘沙門天多宝塔上に建立された。新聞記事には市内名島町山鹿鑄物工場で鑄造され竣工したとある（『福岡日日新聞』一九二六年（大正十五年）七月十八日三頁）。

⑩ 石橋鉄工場（大学通一丁目）

明治三十三年三月に吉塚から春吉寺町へ移転し、業務を拡張し鋳山用精米用諸器械製作で確実に注文に応じるようにした（『福岡日日新聞』一九〇〇年（明治三十三年）三月十七日三頁、五頁）。「移転拡張広告」には「弊工場事業ノ為メ肩書之処ニ移転仕」とあるがそれは石油発動機などの機械製作のために、銅像は吉塚の「大学通」の工場で作っていたと思われる。

◎石橋卯之吉

明治四十四年四月十五日に据付けを完了した博多恵比須橋通新道記念碑を鑄造。碑は恵比須が左脇に鯛を抱え千代松原から恵比須橋を指さしている姿の立像で、同碑の篆額「廣公益」三字は寺原長輝知事の揮毫である（『福岡日日新聞』一九一一年（明治四十四年）四月十六日二頁）。

明治四十五年五月ころ筑紫郡太宰府町の太宰府神社に奉納された青銅製神馬を鑄造。新聞記事では工場の住所は「福岡市外千代」とある

（『福岡日日新聞』一九二二年（明治四十五年）五月二十日五頁）。

大正三年三月ころ田川郡香春町香春の高座^{こうざ}右寺（曹洞宗）に建立された加藤玄秀銅像を鑄造。加藤玄秀は田川郡勾金村の名医。原型は博多下祇園町の博多人形師中ノ子市兵衛による。新聞記事では工場の住所は「福岡市外医科大学通」で、工場名は「石橋卯之吉鑄造業工場」となっている（『福岡日日新聞』一九一四年（大正三年）二月八日九頁）。同年四月ころ久留米市で開催された久留米共進会演芸場付近に設置された唐銅製馬を鑄造。共進会閉会後は水天宮に奉納されること（『福岡日日新聞』一九一四年（大正三年）四月二十九日七頁）。

大正五年五月十二日に除幕式がおこなわれ、大分県宇佐郡封戸村の自邸に設置された水江浩吉銅像を鑄造。前貴族院議員水江浩吉は大分県宇佐郡対戸村出身で多額納税者。同地方有志の発起による寿像で、博多下祇園町の博多人形師中ノ子市兵衛が原型を担当した（『福岡日日新聞』一九一四年（大正三年）二月八日九頁）。同年五月二十二日に嘉穂郡飯塚町真福寺（浄土宗）において、鐘楼新築落成式も兼ね供養式がおこなわれた梵鐘を鑄造（『福岡日日新聞』一九一六年（大正五年）五月二十五日七頁）。同年十二月十三日に築上郡宇島町字松中に設置された小今井潤治銅像を鑄造。小今井潤治（一八一四〜一八七）は豊前宇島で一時代を築いた豪商「萬屋」主人。熱心な浄土真宗門徒で寺院の普請をはじめ、明治十二年に独力で浄土真宗の私立大学校「小今井乗桂校」を開校した（『福岡日日新聞』一九一六年（大正五年）十二月十六日七頁）。原型作者は田

中雪窓である（拙稿「福岡県豊前市 小今井潤治銅像」『筑紫女学園大学人間文化研究所紀要』六五頁 筑紫女学園大学 二〇一七年）。

大正七年八月に逝去した宮城犬三の銅像を鑄造し、田川郡添田町野田にある賀茂神社境内に建立される。宮城犬三（一八五七～一九一八）は田川郡添田町生まれ。貧困患者に施療施薬をなして慈善救済を実行し、あるいは私費を投じて医師や看護師の養成に努めた。没後に同町野田青年会が銅像建設を發起し、経費三、五〇〇円を集めた。慈眼笑みを湛え顔の広い顔に毅然とした羽織袴姿は翁の性格を現わすといわれる。像高六尺、石製台高一丈二尺（福岡日日新聞）一九二二年（大正十）九月二十三日二頁）。

大正八年十一月十六日に除幕式がおこなわれ、久留米市通町の國武金太郎邸に設置された國武喜次郎銅像を鑄造。國武喜次郎（一八四七～一九二七）は久留米耕同業組合を組織するなど久留米耕発展の功勞者（『先人の面影 久留米人物伝記』三〇〇頁 久留米市 一九六一年）。像高五尺八寸、石製台高八尺、経費八、六〇〇円（福岡日日新聞）一九二二年（大正十）九月二日二頁）。

大正十二年五月に糟屋郡箱崎町の筥崎宮に奉納された、一の鳥居横の今の石造狛犬に代替となる前の青銅製狛犬を鑄造。台座背面に刻された「福岡医科大学通り／鑄物師 石橋卯之吉」は今でも実見できる。自らの傘寿記念に奉納した衆議院議員藤金作は八木山峠の桜並木をつくったことでも有名。ちなみにもとの狛犬は昭和十八年に金属供出されたが、その代替の石造狛犬は福岡出身の彫刻家津上昌平の作である（『西日本新聞』一九四三年（昭和十八）十二月二十九日三頁）。同年十月二十一日に筑後市江口字横田の江口地藏堂に安置された銅像を鑄造。この像は戦時中に供出されるが、銘記録に「大正十二年十月二十一日信者

銅像建立ス（中略）／鑄物師福岡市大学通 石橋卯之吉／大鶴寛實」とある（筑紫豊監修『筑後市神社仏閣調査書』（旧八女郡水田村篇）筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 一九六八年）。同年十一月に粕屋郡篠栗町に建立された木原喜造銅像を鑄造。木原喜蔵（一八四二～？）は旅館経営者であるが、架橋や篠栗霊場の堂宇の補修などをおこなった。像高九尺（銅像写真集 偉人の佛〔図版篇〕三二〇頁）。同年十一月二十三日に除幕式がおこなわれ、粕屋郡篠栗村中通田の浦に建立された藤木藤助銅像を鑄造。藤木藤助は幕末に笹栗新四国霊場を創始した。そこで同村有志および各霊場担任者は、藤木藤助の功績を永く記念するために遍路姿の銅像建設を計画した（福岡日日新聞）一九二三年（大正十二）十一月六日三頁）。新聞記事では石橋鑄造所鑄造となっているが、鑄造者が「佐藤氏」（佐藤卯助）になっているものもある（銅像写真集 偉人の佛〔図版篇〕三二〇頁）。

大正十四年四月三十日に建立された、佐賀県小城郡小城町の桜岡公園内にある聖徳太子像を鑄造。両手を前に組み柄香炉を持つ通形の太子立像である（銅像写真集 偉人の佛〔図版篇〕四八頁）。

昭和三十六年九月六日に復元除幕式がおこなわれた、福岡市東区東公園日蓮上人銅像のそばにある日菅上人頌徳碑を鑄造。原型制作者は博多人形師の中ノ子タミ。なお原物は昭和九年に日菅上人の第二十三回忌のために日本画家松尾晃華が肖像原型を制作し、深見平次郎が鑄造している（『日菅上人頌徳碑』台座背面碑文、実見二〇〇五年）。ただし大正十二年の聖徳太子像鑄造から約四十年がたっており、台座背面に書かれた鑄造者石橋卯之吉が同一人物か、あるいは子息などなのかは課

題である。

⑪ 平藤鑄造所（大学通三丁目）

新聞広告に「各宗仏壇仏具商並ニ銅像記念碑製作所 博多上新川端町平藤仏具店 大学三丁目平藤鑄造所 故吉岡大佐銅像鑄造」とあり、博多上新川端町五十六番地に平藤仏具店を営み、銅像を鑄造する平藤鑄造所は仏具店とは別に大学通三丁目にあった。そして代表的な例として「故吉岡大佐銅像」をあげている（『福岡日日新聞』一九二六年（大正十五年）十月二十五日三頁）。

◎平藤米太郎

大正十四年七月、佐賀県武雄市の西福寺（浄土宗）境内に建立された誉輿上人銅像を鑄造（『福岡日日新聞』一九二五年（大正十四）七月三日二頁）。木造原型は福岡市の彫刻家田中雪窓が制作した。

大正十五年三月七日に除幕式がおこなわれた福岡市西公園の吉岡友

愛大佐銅像を鑄造（『軍神吉岡大佐銅像』『筑紫史談』第三七集五二頁 筑紫史

談会 一九二六年）。吉岡友愛歩兵大佐は福岡市出身で、日露戦争の奉

天大会戦で壮烈な戦死をとげた。銅像建設を発起した戦死吉岡大佐顕

彰会は彫刻家田中雪窓に対し、木造原型制作ばかりでなく鑄造や石製

基台にいたるまで、全体的美観の統一に尽力したということで感謝状

を贈っている（『感謝状』戦死吉岡大佐顕彰会 一九二六年三月七日）。外套

を着した立像で、鉄柵には鉄条網を張り碑文には故人の最期を飾った

布告文を刻むなど普通の銅像とは趣を異にしている（『福岡日日新聞』

一九二六年（大正十五年）三月八日三頁）。像高一丈、総高二丈五尺。また日

活にて軍事映画「吉岡大佐」（三枝源次郎監督）がつくられ、大佐の銅像曳きや除幕式も撮影され、福岡歩兵第二十四聯隊一個大隊五〇〇名が参加して福岡市内の城西樋井川付近で奉天激戦にみだてた模擬戦が演じられたりしている（『福岡日日新聞』一九二六年（大正十五年）四月二十日二頁）。

⑫ 桑野鑄造所（東公園大学通一丁目）

◎桑野元次郎

『福岡実業案内記 前編』（早田孫太郎著 聚英社 一九一四年）に、「鑄物製造業／千代町大学通一丁目／桑野元次郎」という文字だけの広告が掲載されている。

大正四年四月十七日に除幕式をおこなった村山直次郎銅像（寿像）

を鑄造。村山直次郎が福岡市博多下呉服町にある愛生堂薬舗の店前に

据え付けるために発注したものである（『福岡日日新聞』一九二五年（大正

四）四月十九日五頁）。

大正十二年四月に福岡県田川郡添田町大字庄天満宮内に建設された、宮城律子銅像の原型を制作した。総高一丈八尺、工費は六、〇〇〇円で建設したのは添田町慈善婦人会（『銅像写真集 偉人の佛（図版篇）』二三六頁）。

大正十三年六月二十一日に除幕式がおこなわれた、佐世保市八幡町の八幡神社境内に建立された忠臣村山義信銅像（騎馬像）を鑄造。村山義信（？）（一三三三）は新田義貞に従って鎌倉の北条高時を攻めて戦死した武将である（『福岡日日新聞』一九二三年（大正十二年）十一月六日三

⑬ 音川工場（博多上祇園町）

◎音川宇佐次

大正十三年の春ころ福岡県宗像郡の宮地嶽神社に奉納された大唐獅子一對を鑄造。宮地嶽神社改築記念として博多および宗像郡宮司地方の信者有志が発起して奉納した（『福岡日日新聞』一九二三年（大正十二）十一月十七日三頁）。

大正十四年正月に竣成し、宗像郡東郷村（現・宗像市富地原）浄蓮寺（浄土真宗本願寺派）境内に設置された孝子武丸正助銅像を鑄造。前年に地元有志が記念碑「正助馬引きの像」の建立を発起した。なお浄蓮寺には孝子武丸正助の墓がある（『福岡日日新聞』一九二五年（大正十四）二月四日三頁）。

大正十五年一月ころに落成式をおこなった、糟屋郡千代町二丁目（現・福岡市博多区千代町）にある玄徳新社の寄付者の名前を刻んだ記念碑を鑄造。前年の十二月に玄徳新社の社殿改築が完成したので、寄付者の名を刻んだ記念碑を建立することにした（『福岡日日新聞』一九二五年（大正十四）十二月二十六日三頁）。

⑭ 佐藤卯助（博多金屋町）

明治十七年六月に宗像大社本殿入口の門前にある青銅製狛犬（阿形）の尻尾を、山鹿平十郎包永や山鹿平十郎包輝とともに再鑄し修理した。狛犬に書かれている銘は「佐藤卯助」となっている。（実見）

明治三十一年十一月二十日に竣工した、筑紫郡豊平村（福岡市博多区千代）松源寺（浄土真宗本願寺派）の大梵鐘を白根末吉とともに主任となって鑄造する（『福岡日日新聞』一八九八年（明治三十一）三月十二日三頁）。ただし八か月後の十一月二十日付け同紙では柴田職工場にて鑄造と報じている（『福岡日日新聞』一八九八年（明治三十一）十一月二十日五頁）。

明治四十五年三月末ころに博多御供所町の聖福寺に建立された、釈迦牟尼仏や高砂爺媪銅像は深見平次郎が鑄造したが、その供養塔および台座周囲の鑄造を担当する（『福岡日日新聞』一九二一年（明治四十四）十一月二十日五頁）。

大正七年五月十九日に除幕式がおこなわれた、粕屋郡篠栗村の篠栗村社隣地にある藤金作銅像（寿像）を鑄造。粕屋郡篠栗村に住む藤金作は、多年議政壇上の人として国政に参与し功績をあげてきた。よって地方の有志によって銅像建設計画が発案された（『福岡日日新聞』一九一八年（大正七）五月二十一日四頁）。

⑮ 白根鑄鉄工場（筑紫郡千代村松原病院前）

◎白根末吉

明治三十一年十一月二十日に竣工した、筑紫郡豊平村（現・福岡市博多区千代）松源寺の大梵鐘を佐藤卯助とともに鑄造する（『福岡日日新聞』一八九八年（明治三十一）三月十二日三頁）。ただし八か月後の十一月二十日付け同紙では同鐘は柴田職工場にて鑄造されたと報じている（『福岡日日新聞』一八九八年（明治三十一）十一月二十日五頁）。

①⑥ 柴田職工場（博多妙楽寺新町）

前記の如く『福岡日日新聞』明治三十一年三月十二日付けで、松源寺の大梵鐘は佐藤勿助と白根末吉とで鑄造されることになっていたが、後日の報道では柴田職工場にて鑄造され、竣工したので十一月二十日の午前九時より豊平村総出で同職工場から行町や綱場町、中間町、石堂町通りを通って曳廻ることの届け出を福岡警察署に提出したとある（『福岡日日新聞』一八九八年（明治三十一年）十一月二十日五頁）。

①⑦ 紙與商店鉄工場（博多西町）

明治二十八年十一月四日の早朝午前二時すぎに出火。夜回りの者がこれを発見しすぐに近所の人家を呼び起こして鎮火した。原因は轆ふいしの残り火より発火したらしいとのこと（『福岡日日新聞』一八九五年（明治二十八年）十一月五日三頁）。「紙與」は博多の巨商渡辺家が経営する企業で、呉服や日常生活雑貨などを主に扱っており、鉄工場を経営していたことは特記しておきたい。

①⑧ 左仁三郎

主に農具を製造している鍛冶である。南北朝時代の博多に於いて国宝刀「江雪左文字」を鍛えた刀工「左」の末裔か、あるいはそれを意識して付けた名前か不明である。明治維新の廢刀令などで職を失った刀工が農具鍛冶になった例は多いが、農具の名工であることにはまじがない。

明治二十九年に農具などの博多物産五品品評会の委員となり、出品

した鍬が農具部門の一等賞となる（『福岡日日新聞』一八九六年（明治二十九）三月十日二頁、四月二十八日三頁）。翌年の福岡市物産十種品評会でも鍬が農具部門の一等賞となる（『福岡日日新聞』一八九七年（明治三十）五月二十五日三頁）。明治三十四年には福岡市工芸品品評会常務委員（陳列係）となり（『福岡日日新聞』一九〇一年（明治三十四）十月四日一頁）、三十七年には福岡市第七回工芸品品評会農具同業組合委員となり（『福岡日日新聞』一九〇四年（明治三十七）一月十九日一頁）、同品評会で二等賞を受賞（『福岡日日新聞』一九〇四年（明治三十七）四月一日三頁）。四十三年三月には福岡市で開催された九州沖繩八県聯合共進会の金属器部門の審査員をつとめている（『福岡日日新聞』一九一〇年（明治四十三）三月八日二頁）。

①⑨ 守次（筑紫郡堅粕村）

福岡藩の刀工守次家の末裔か。左同様に刀剣の需用が無くなって農具鍛冶へと転身した例である。

◎ 守次恒次郎

明治三十七年四月三十日に開幕する米國聖路易万国博覽会に鍬や鎌などの農具を出品（『福岡日日新聞』一九〇三年（明治三十六）九月三日二頁）。

②⑩ 稻光米次郎（小倉鑄物師町、現・北九州市小倉北区鑄物師町）

明治三十年十二月一日に初撞式がおこなわれた遠賀郡矢作村（現・遠賀郡岡垣町大字高倉）龍昌寺（曹洞宗）の征清戦死者追吊記念鐘を鑄造。遠賀郡矢作村の有志者によって、二十七八年戦役戦死者の靈を慰めるために発起された（『福岡日日新聞』一八九六年（明治二十九）三月二

⑳ 村上鉄工場 (鞍手郡直方町、現・直方市)

◎村上福太郎

◎村上荒吉

明治三十五年十月十三日に梵鐘供養がおこなわれた、鞍手郡直方町 (現・直方市日吉町) の長遠寺 (日蓮宗) に奉納された梵鐘を铸造。

この梵鐘は村上福太郎と村上荒吉両氏の發起により铸造されたものである (『福岡日日新聞』一九〇二年 (明治三十五年) 十月十二日四頁)。

つぎに福岡県内に工場がある鋳物師や鋳金家ではないが県下に作例がある鋳物師についてみていくことにする。

㉒ 谷口鉄工場 (佐賀市長瀬町)

谷口家は江戸時代を通じて佐賀藩の御用鋳物師として活躍し、石火矢などの武器をはじめ茶釜や仏具などを铸造した。鍋島藩の熱心な西洋の工業技術の研究は、それに参加していた鋳物師谷口家に技術的に大きな影響を与えた。

◎谷口清八 (十一代)

谷口清八は弘化二年 (一八四五) 生まれで、明治四十四年 (一九一〇) に没した明治期の実業家。

明治三十三年 (一九〇〇) ころ英彦山神社 (現・福岡県田川郡添田町大字英彦山) にある銅鳥居の銅額を修繕。銅鳥居は寛永十四年 (一

六七七) に肥前藩主鍋島勝茂が寄進したもので、そこには靈元天皇から下賜された「英彦山」という三字の銅額がかかげられていた。しかし額面が朽敗してきたので、有志者が佐賀県内にて寄付金を集め、谷口鉄工場は別に工場一棟を新築して修繕に着手することにした (『福岡日日新聞』一九〇〇年 (明治三十三年) 五月一日三頁)。明治三十九年三月十一日から佐賀市で開会した第十二回九州沖縄八県聯合共進会会場には、谷口鉄工所が私設陳列館を開設し、最近制作した作品として日蓮上人銅像や亀山上皇銅像とともに英彦山神社靈元天皇御宸筆勅額も写真等に解説をつけて陳列した (『福岡日日新聞』一九〇六年 (明治三十九年) 三月十六日五頁)。

明治三十七年十一月八日に除幕式がおこなわれた、福岡市外東公園の日蓮上人銅像 (福岡市指定文化財) を铸造。日蓮宗僧佐野前助の熱心な建設運動によって実現をみたもので、木造原型は日蓮宗徒の彫刻家竹内久一が担当し、铸造は東京美術学校の岡崎雪聲に委嘱された。しかし手、足、経卷等の部分は竣工したが、頭部を鋳損じて改鋳している (『福岡日日新聞』一八九八年 (明治三十二年) 六月五日三頁)。そして胴体部は熱心な日蓮宗徒の谷口清八が引き受けた。なお石製台座の側面に嵌入された上人物語の青銅製レリーフは深見平次郎本店が铸造している (『馬耕鋤先 鍋釜銅器』)。像高三丈五尺、総高七丈。

日蓮上人銅像に遅れること約一ヶ月半。十二月二十五日に除幕式がおこなわれた、同じ東公園に建立された元寇記念碑亀山上皇銅像 (福岡県指定文化財) を铸造。福岡警察署長であった湯地丈雄が建設費募集の全国講演旅行を行い、そして佐野前助の協力で完成した。明治三

十九年二月、佐賀市内の谷口鉄工場にて、彫刻家山崎朝雲が制作した美術界近來の逸品と称される原型木型が組み立てられた〔福岡日日新聞〕一九〇四年（明治三十七）二月九日三頁）。銅材の一部は日清戦争で使われた鹵獲砲を用いている〔福岡日日新聞〕一九二二年（大正十）八月二十一日二頁）。像高一丈六尺、総高七丈二尺。

明治四十年五月ころ除幕式がおこなわれた、福岡市西公園の三十七八年戦役記念碑を鑄造。記念碑は石製基台の頂上に銅製の聯隊旗および銃器を立て、その下方正面には銅張した「明治三十七八年戦役忠魂碑」の文字が付され、その上部に金鷄を掲げている〔福岡日日新聞〕一九〇六年（明治三十九）十月十一日五頁）。谷口清八の死亡記事の業績のなかに、「西公園日露戦役記念碑」が谷口の代表作のひとつとして紹介されている〔福岡日日新聞〕一九一二年（明治四十四）八月十日二頁）。

明治四十年五月ころ西公園に建設された福岡歩兵第二十四聯隊忠魂記念碑を鑄造。福岡第二十四聯隊將校団の発起による、日露戦争戦没兵士の鎮魂と旅順総攻撃における功勳を後世につたえるための記念碑建設計画である。設計図では紀念品として旅順から持ち帰った魚形水雷を標としている〔福岡日日新聞〕一八九五年（明治二十八）八月十日三頁）。城内練兵場に建設予定の忠魂碑は、西公園に建設される三十七八年戦役記念碑の左側に移設し、周辺の整地もおこなわれた〔福岡日日新聞〕

一九〇六年（明治三十九）十月十一日五頁）。写真説明文に「福岡西公園の戦役記念碑 上図は日露戦役記念碑 下図は日清戦役記念碑」とあるので、すでに両記念碑は竣工していることがわかる〔福岡日日新聞〕一九〇七年（明治四十）六月十七日一頁）。

⑳ 久野鉄工場（東京市）

◎ 久野留之助

岩手県盛岡城跡公園にある南部利祥騎馬像（一九〇八）を鑄造したので知られている。

大正四年（一九一五）五月六日に久留米市瀬の下町の水天宮境内にて除幕式がおこなわれた真木和泉守保臣銅像を鑄造。真木保臣（一八一三～一八六四）は幕末の勤王の志士で、真木保臣顕彰会員らが有馬別邸に集会し銅像建設を発起した〔福岡日日新聞〕一九一二年（明治四十五）一月二十四日二頁）。姿は東京の故実研究家が考案した小具足の上に陣羽織を被り太刀を佩き、右手に采配を握って腰部に持たせた直立正視の姿勢で、深見鉄工場も案をだすが採用されなかった。肖像は日蓮上人銅像台座のレリーフの原画を描いた画家矢田一嘯が担当し、配所先の八女郡水田の古老や一人娘の意見などを聞いて制作した〔福岡日日新聞〕一九一二年（明治四十五）六月五日二頁）。なお据付けには博多の深見鉄工場が担当している〔福岡日日新聞〕一九一四年（大正三）四月十七日七頁）。像高一丈二尺、総高二丈九尺五寸。昭和十九年に金属供出によって失われ、現在ある像は昭和四十三年に地元の鑄金家豊田勝秋が製作したもの。

㉑ 岡崎雪聲（東京市）

岡崎雪聲（一八五四～一九二二）は山城国（京都）出身の鑄金家で東京美術学校教授。はじめは釜師の父に鑄物の業を学び、のち鑄金家鈴木長吉の門人となる。東京上野公園にある西郷隆盛銅像（一八九八）

や宮城前広場の楠木正成銅像（一九〇〇）は有名。

明治三十七年十一月八日に除幕式がおこなわれた、福岡市外東公園に建立された日蓮上人銅像の頭部および手と足の部分や経巻を鑄造。

しかし頭部鑄造がうまくいかず改鑄することになった。材料となる銅鏡二、〇〇〇貫はすでに講中より寄付されているが、この調子ではいつ完成するのかと危ぶまれた（『福岡日日新聞』一八九八年（明治三十一）

六月五日三頁）。最終的には胴体部は谷口鉄工所が制作するが、頭部の

首回りと胴体部の差し込む径に差が生じ、雨水が胎内に浸水することになる。日本古来の寄木造りの技法と西洋のボルト締めとの和洋折衷技

法が用いられている（中牟田佳彰・田中一幸・木下禾大『福岡市東公園 日蓮上人銅像』制作工程と歴史資料』五五頁 西日本新聞社 一九八六年）。

大正二年十月十七日に除幕式をおこなった、福岡県鞍手郡宮田町百合野の新邸に設置された貝島太助銅像を鑄造する（『福岡日日新聞』一九

一三年（大正二）十月二十五頁）。貝島太助（一八四五～一九一六）は筑豊炭鉱界の立志伝中の人物。像高は等身大で石製台高は一丈。

②5 清水亀蔵（東京市）

清水亀蔵（一八七五～一九四八）は広島出身の彫金家で東京美術学校教授。ほかに帝室技芸員や日本芸術院会員を歴任し、加納夏雄系の伝統的彫金技法を伝えた。

大正十一年三月六日に宮内省へ納入された、福岡の香椎宮の青銅製釣燈籠を制作。東宮妃（のちの貞明皇后）は三月に、昨秋渡欧した東宮（のちの大正天皇）の平安を祈願するよう、香椎宮と大阪住吉宮両

社に使者を差遣わした。そして十月に東宮が無事帰朝したので、事務官を両社に参向させて釣燈籠一对を奉納した。釣燈籠の制作は東京美術学校に下命され、渡邊啓三教授が図案を謹製、清水亀蔵教授らが制作し、組立が終了したところで宮内省に納付された。大きさは高さ一尺六寸五分、横一尺五寸四分で金色に燦然と輝く精巧なものであった（『福岡日日新聞』一九三二年（大正十二）三月八日七頁）。

②6 高尾銅器合名会社（大阪市）

同社は神戸市湊川公園にある聖徳太子騎馬像（一九二一、阪神大震災で聖徳太子は損壊して今は馬のみの像）や銅製文房具などで知られる。

大正五年七月八日に小倉城内（現・北九州市小倉北区城内）の八坂神社にて献納式がおこなわれた青銅製馬を鑄造。小倉市の嶋田金次郎が献納した（『福岡日日新聞』一九一六年（大正五）七月十日五頁）。

おわりに

維新をやり遂げた明治新政府の次の課題は、富国強兵でありそのための軍国必須の条件である近代兵器の調達配備である。欧米列強艦隊の来日に対する沿岸警備は優先事項のひとつで、以前の福岡藩の場合には磯野や深見といったお抱え鋳物師が石火矢（大砲）を製造してお台場に設置して対処していたが、廃藩ののちは維新政府が軍制兵備をしなければいけなくなった。大山巖陸軍卿の命を受け軍制の近代化を

担った兵部大輔大村益次郎は大阪に砲兵工廠を建設する途中で凶刃に倒れたが、大山はヨーロッパの多くの国において主流であった鋼製砲よりも、イタリアに倣って国内産出額の豊富な銅を用いて砲を製造することにした。明治十四年に砲兵大尉太田徳三郎をイタリアへ派遣し、のちに砲兵工廠長官になったグリルロ少佐やソラテジラをお雇い外国人として招き、七糧青銅野砲や山砲の製造に着手した。青銅製大砲は日清戦争（一八九四～九五）においてはわが国唯一の野砲として活躍し、北支事変（一九〇〇～一九〇一）のときも列強の新装火砲に伍して威力を発揮した（『福岡日日新聞』一九四〇年（昭和十五）十月二十日二頁）。しかし銅材料が入手しやすいという経済面と鋼製砲のほうが発射時の暴発の危険性が高いという安全面から、「伊国式火砲時代」といわれた大砲製造も、明治十八年頃にはドイツのクルップ砲など鋼製砲の製造が軌道にのりはじめ、わが国でも鋼製砲に転換するようになり、「銅ばなれ」とか「イタリアばなれ」が大砲製造界でいわれるようになった（三宅宏司『大阪砲兵工廠の創設』一九八四年）。明治三十年代になると青銅製大砲の需用の減少から、青銅が銅像や記念碑などのモニュメントに使用しやすくなったと思われ、明治三十一年（一八九八）の博多大仏や、三十七年の日蓮上人銅像そして亀山上皇銅像など巨大モニュメントや個人顕彰銅像の建立が容易になったと考えられる。その需要は全国的にみられ、ここ福岡でも磯野家や深見家といった旧藩時代から続く老舗鋳物師と新規参入鋳物師が活動し、さらに隣県佐賀の老舗谷口家も大きな仕事を担ったのである。

この稿では明治大正期の、主に福岡市内で活動した鋳物師を中心に

みてみることにし、作例によっては鋳金家や彫金家も交えた。その際の主な出典として、現在福岡市に本社がある『西日本新聞』の前身である、明治一〇年に創刊された『筑紫新聞』およびその後の『福岡日日新聞』のCD-ROM版、明治編と大正編あわせてCD二二〇枚から抽出した関連記事である。従って二次資料ゆえ、載っている銅像等の一点一点の調査が十分とは言えないが、また収録分には欠頁や破損および印刷が不鮮明やインクが滲んで判読不能なものもあって、完全判読が出来なかったところがあることは御了承いただきたい。

最後に『福岡日日新聞』CD-ROM版の調査に協力をいただきました。また、福岡市博物館福岡市史編さん室にお礼申し上げます。

（たなべ たかお…人間文化研究所 客員研究員）

近代福岡の鋳物師

田鍋隆男

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報

第二十九号 二〇一八年